
僕の存在は幽霊同等

勿論西村

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕のは幽霊同等

【Nコード】

N8019Y

【作者名】

勿論西村

【あらすじ】

僕は前向きではないと思う、
どちらかと言うと後ろ向きだ。

授業中にもそんなネガティブ思考を働かせている・・・と

三階の窓の外にありえない光景を見る。
そこから僕の最悪な人生が始まる。

卑屈幽霊

これはあくまでも僕の考え

この世界に生きる者はすべて価値を決められているようなものだ
勉強ができない、運動ができない、成績が悪い、
学生はソレ等（他）で価値を決められる。

僕『山本統也』もソレ等で価値を決められた・・・気がした。
成績は平均に後ちよつとで達する位、

運動は50m7秒後半

友達は殆んどいない・・・いや、一人もいない
そして僕は価値が下位だ、だから誰も寄つて来ない
いつも一人、授業中も挙手しても無視されるだけ、
ま、あまり挙手しないけど。

出席の時なんか、顔を伏せてるだけで、居ない事にされる
今まで17年間生きてきて、腹立たしい言葉は

リア充！

最近では？はない？でリア充は死ねなどと言っているが
死んだところで、僕がリア充になる事は誓ってない。

ぶっちゃけ、僕が死んだところで誰も悲しまないし、誰も気づかない
いつそのこと死のうか？自殺？

そんなことして、何か問題になったら嫌だ
自殺して執念残してその場所を呪うのもゴメンだ
霊媒師によって苦しまされ召されるだけだ。

？ほん怖？とかで除霊とかでとりつかれてる奴、あれ苦しそうだ
ま、見せ方。演技だと思うけどね。

ソレと僕は霊の存在は否定も肯定もしない。
居てもいなくても害は無い

ならば、いつそ事故で死んだ方が良いかな。
そっちの方が執念残るか？

ま、良いやどうせ生きても死んでも同じだ
中学の時なんて、ちょっと事故して退院した翌日には僕の机に花が
添えられていた

綺麗な白菊。

先生すら取り除かない。

寄って僕は死んでもよいのだ
だったら死んでやりたいところだけど。 そんな勇氣は無い。
ただでさえ人に話す勇氣すらないのに。
人を離すのは楽なのにな。

最後に人と話したのは・・・

「僕の鞆返せ、」

「へへへとつてみる。」

そんなやりとりだった、

そう、僕の鞆を取りあげた三人がパスし合って
僕の鞆を返してくれない。

特にイジメではない・・・と思う

別に靴を隠されたり、机に落書きされたりしたただけだし
うん。 イジメじゃないよ、かまってほしかったんだ。

なら、話しかけてくれれば良いのに・・・

そう言う事を考えると・・・やっぱイジメだな

今となってはそんな事は無い、イジメたところで利益は無いからな。
それだけ僕の価値が下がってるってことだけだ。

あげる気も、上げられる気もしない。

それどころか、いつそ下げて、居ないに等しいくらいにしてやりたい。

僕の存在なんていないんだ。

昔は・・・と言っても中学生の時。

僕は学校に行くのが楽しかったし

ゲームプレイが趣味だった。

他にも漫画や小説も読んでいて飽きなかった・・・が

『彼』との交流は楽しかった。

しかし今の僕は友達も趣味もない。

生きてても無駄なのだから――

《困ったのだ。》

遠くからそんな声が聞こえてくる。誰かが困っているのだろうか。助ける気はさらさらない。

ふと伏せている顔を上げ、声主を探してみる。

しかし誰かが困っている様子もなければ、喋っているとも思えない。気のせいだな。僕は友達が少ないから幻聴が聞こえたんだな

《ホントに困ったのだ。》

しかし、聞こえるモノは聞こえる。

何度も言うが助ける気は無い。しかし声主が気になる。

教室中を見渡し、確認する・・・と、ふと窓の外に目をやった

そこに映るありえない光景に目が釘付けになった。

この教室は3階。窓の外に僕と同じ年くらいの女の子が立っている。いや浮いている

「何で!？」

僕は思わず立ちあがり、大声を出してしまった。しかし周りはその事は気にせず

黒板を見ている。ちなみに今は英語の授業

《困ったのだ。マジで困ったのだ。困り過ぎなのだ》

無視だ、あんなのは夢だ助ける気は無い、ましてあの女の子には足が無い。

しかし、女の子（いや幽霊だ確信した）は下向いて何かを探している様子だ。

まさか・・・

《困ったのだ、足が無いのだ》

「——ッ！」

大声で叫びそうになるが授業中だと言う事を考え、すんのところでおさえる

こいつ、わかってない。

成仏させてやるか。でも僕は霊媒師ではない。

ソレと苦しませる気は無い。

「先生、気持ちが悪いので、退席します」

僕が手を上げそう告げるが、こくんつ頷くだけで声を出さない先公そこである、男子生徒（名前忘れたけど、確か佐藤なんとか）が

「お前の顔が気持ち悪いんだろ？」

「お前には言われたくない」

そう言うので、僕は即答で返し、奴（佐藤何とか・・・たぶん）は鏡をチェックした

鏡と一生相談してる

さらに気分がオチ、僕が席から窓へと向かう。

「・・・おい・・・おい。」

《何なのだ？アタイは今困ってるのだ。》

「足・・・探してんだろ？」

《お前、知ってるのか？》

「知らん、でも一つ言えるのが——」

君は幽霊で、僕はなぜか幽霊が見えるようになってしまった。

出会幽霊

こいつ、霊の加藤梓。今そいつになんで足が無いのかを説明中

「——だからお前は幽霊なの！死んでるの」

「ソレはわかったのだ、だからなぜ足が無いのだ？」

幽霊は皆、足が無いものだと思うが、もしかしたら違うのかもしれない。

あいにくいま見えるのはこいつのみ

「お前は他の霊は見えないのか？」

「見えるに決まってるのだ。侮らないでほしいのだ」
「やっぱり俺はこいつしか見えないようだ。」

「その霊に、足は付いてるのか？」

「やっぱり僕の思ったとうりに、幽霊」足が無い

「ある」

「何だと!？」

「てことは他の霊には足があるのか？」

キンコンカーン・・・チャイムが鳴った。

「それでは授業を終わります。」

「そうだった、今は授業中だった。」

「アタイの足を探してほしいのだ。」

「断る。僕はそんなに御人好しじゃない。」

「僕が即答で断ると、梓（霊）が頬を膨らませる。」

「アタイは困ってるのだ、困ってる人を見たら助けるのが普通なのだ」

「お前、幽霊じゃん。」

「がーん!!そうだったのだ、アタイは幽霊だったのだ・・・」
床に手をつき、落ち込む梓。周りは僕が独り言を言っていると思い、

冷たい視線

「なんで、こいつしか見えないんだろうか。」

「アタイには見えるのだ。今アンタの後ろで男の変質者の霊が全裸になってるのだ。それから右では不良の霊が唾をかけてるのだ。それからグラサンの霊が頭でタバコを消してるのだ。」

やりたい放題だな。

「あ、今全裸の霊がアンタに抱きついた！」

「もう良い！気持ち悪い！」

ま、物理干渉が出来ないだけ良いか、見えないのは当たり前かな。

・・・ならこいつは触れるのか？

僕がそーっと手を伸ばす。

「変態！何触ろうとしてるのだ！？」

「あ、いやその、触れるのかなあって」

「そんなに触りたいなら、言ってくれば良いのに・・・」

「違う！そんな事は誓ってない。触っても価値も上がらないし・・・

・・・」

しまった、取り乱してしまった

「慌てるところが怪しいのだ・・・ま、良いのだ触らせてあげるのだ（ひよい）」

梓が僕に手を伸ばす。するとスーと僕の身体を通り抜けた

「あれ？通り抜けたのだ。」

「やっぱり、触れないのか・・・？触るには血の契約とかかな？」

ま、悪魔じゃないからそんなのは無いと思うけどね。

「分かったのだ。（どぶどぶ）」

そう言うとき皿に何かを注ぎだした。赤い何かを。

コレってまさか・・・

「トマトケチャップなのだ。」

「やっぱり！血だって。血！てか、ケチャップと皿には触れんのか！？」

「コレは霊界のモノなのだ。」

そうか、霊界のものなら触れるのか。

そう思うといきなり、梓が僕にめがけて皿をなげてきた。

「（シュンッ）あぶねえじゃねえか！」

「大丈夫なのだ。当たらないから。（ぴゅん）」

「そうか、当たらないんだった——（バシッ）」

思いつきりヒットしたのだが？

「アハハ、あたったのだ。」

僕の顔からケチャップが流れ落ちて、周りの皆が絶叫したのは目に見えている

僕は保健室に連れて行かれた。

「全く。お前のせいだぞ。」

「でも、触れるようになったのだ。」

そう、ケチャップのせいかは解らないが、梓に触れる。

「貴方、誰と話しているのかしら？」

僕が保健室の椅子に座って話していると（客観的に独り言）隣に、座っていた長い黒髪の女性に声をかけられる。

「貴方、もしかして・・・見えるのかしら？」

「ええ！君も見えるの！？」

僕は驚いた。僕以外にも見える人が居るのか・・・と

「ええ。見えるわ、貴方の後ろでチ○コをこすりつけている変態の霊がね。」

最悪だ——よりもよって、そっちかよ！！

不良やグラサンならまだいい、見えるのが変態だぞ！

「あ、いやソレじゃなくて。女の子です。」

「ああ君と同年くらいの子かい？」

よかった、梓の事も見えるんだ

「そ、そうです！他のは見えませんが、彼女は見えるんです。」

「

「ソレはよかつたわね、貴方の後ろで『ピ——』や『ギャシャアア』してるのなんて見えたら死ぬよ」

そんなに酷いのか——！！！！

「それより、貴方名前はなんて言うの？」

「僕は、山本統也です。そしてこっちの霊が——」

「知ってるわ、加藤梓ね。アタシは宮山彩乃。」

凜とした顔で自己紹介をする・・・あれ？なんで梓の事知ってるんだ？

「なんで知ってるんですか？梓の事。」

「貴方レベルの人じゃ、2レベほどでしょう？」

レベル？何の頭の？どうせ僕はレベル2の頭脳ですよ。

「その子は1週間前に亡くなった子よ。ま、霊力が弱い事もあるけど。」

???意味がさっぱり分からない。

「つまり、その子の霊レベルが2で貴方の見える最大レベルは2程度って事よ」

うーんだから僕はそこまで霊を見る事が出来ないって事か？

「ちなみに、最大は10レベルよ」

「それじゃあ、宮山さんはなんレベルくらいなの？」

「アタシ？アタシは・・・・・・10よ」

ため息交じりにそう言う宮山さん

「10って、最高レベルじゃあ・・・」

「あら。関心がありませんね。」

別にそんなレベル高くても嬉しくもない

そんな事より、この悪霊を何とかしてほしい。

「何とか出来ないわ。」

「はえっ!？」

どうして僕の思ってる事が解ったんだろうか。

「レベル5以上になると半径1mの人間の心の中が読めるのよ。」
そんな能力が身に付くのか。

だんだん興味がわいてきて、僕はベッドに腰をかけた

「聞く気になったの？」

「うん。」

「じゃあまず、この霊を見えなくさせる方法ね」

「何だ有るんじゃないか。」

僕はさっきの言葉との矛盾を感じながら話を聞いた。

「矛盾してると思ってるね。まあいいわ」

「よくないよ、出来るのか、出来ないのかはつきりして！」

「出来るには、出来る。でも出来ない。」

はあ何言っただこいつ意味わかんない。

出来るけど出来ない？

「もう一度言うけど、アタシは心の中を読めるのよ。」

僕は心の中を読まれ驚き、跳ね上がる

ヤベツ。読まれた。大変だな

「大変よ。見えなくさせるのは。」

「取り合えず、方法を教えてください。」

僕が真剣に宮山さんの顔を見て言うと

宮山さんが目を閉じ、

「ポジティブになる。ただそれだけ」

淡々と言う。

何だ、それなら簡単じゃないか

「そうはいかないの。貴方レベルならまだ大丈夫、5以上行くと・

・

そうか。他人の心の中が読めて、傷つき更にネガティブになるのか。

と言う事は、この霊レベルはネガティブレベルってことか？

自分ではもっとネガティブだと思ってたけど、こんなレベルの高い

ネガティブ野郎が居るなんて、僕も救いようがあるな

「そうよ・・・どうせアタシは救いようのない、カス人間よ」

僕の目の前で床に手をつき傾れ込む宮山さん

うわぁめんどくせえ早く保健室を出よう。

「どうせアタシはめんどくさくて、周りに誰もいないわ。貴方もアタシを避けるんでしょ？」

宮山さんの周りには黒い空気が広がっているように見えた。知らん、こんなやつは知らん。助けても俺の価値は上がらない。

「そ、そう貴方はそんな人間なんだね。アタシを殺しても良いって言うのね」

「良い！」

僕はこんなネガティブ野郎は見捨て自分だけがよければ良い腰を上げ、僕は保健室を出た

「さて、コレからどうするか。取り合えずレベルを下げないと」

僕が真剣に考えながら歩いていると梓が僕の顔を覗きこみ

「アタイの足はどうなったのだ？」と言った。

「黙ってる！」

どうやって、レベルを下げるか・・・取り合えず

「明日に向かつてはっしるー！」

僕が右手を上げ大声で叫ぶと、近くに居た女子二人と目があつた

「ゲッ、何アレ。」

「キモっ」

駄目だ、明日が真っ暗で走ったら地の底に落ちそうだよ

どうせ僕の明日、未来は暗いんだよ・・・イカンこのままじゃ

「今までこのくらい道を歩いてきたんだ！明日も行けるよ。」

「それよりアタイの足！」

「解った解った。明日も頑張るよ！」

「独り言だよ。キモイね。」

今までも暗かったんだ、明日頑張ってもどうせ暗いんだろう。なら頑張っても同じよな。

「ねえねえアタイの足。」

足がなければ、浮いてこの暗い底も越えられそうだな

「——よし死のう！」

「スイマセン！キモイとか言ってゴメンなさい！」

「早まっちゃだめだよ！」

なぜか近くに居た女子生徒二人に謝られた。

コレは気まずい……

「いや別に冗談だから」

「だ、だよね、まあアンタみたいなのが死んでも変わらないけどね」

死のう。

ダダダダダ……

「どうして屋上に向かうのだ？」

「飛ぶ。明日に向かって。地の底に……」

ガチャンッ

屋上の扉を思い切り開く。この学校は4階建て。

「こんなところから落ちたら……」

痛い。うん痛い。確実に痛い

「止めよう。どうせ死んでも真っ暗、生きても真っ暗」

「それよりアタイの足！」

「お前さつきから、それしか言っていないな！」

ん？待て、もしこいつが足を手に入ればこいつは僕から離れるのでは？

「よし、足を探そう。」

「どうしたのだ、急に、気味が悪いのだ。」

霊にそんなこと言われたくない。

て、霊にそんなこと言われる僕は……僕は

「一体何なんだ——！！！！！！！」

「霊同等の影の薄い半透明な人間。」

くそおおおおおおおおおおおおおおおおおお

水準幽霊

梓の足を探し出して、解放されやる。

「取り合えず。お前何処で死んだんだ？」

「うーんどつかの踏切で無残に死んだのは覚えてるのだ。」

無残に死んだのか。それにしてもこの霊力が弱いんじゃないのか？

ま、僕には関係ないけどね

「その踏切が何処かわからないんじゃないかな。始まんないな。」

「でもでも、無残に死んだのだ。」

「解った解った。無残ね」

僕があごに手を当てながら歩く。

誰かに聞いた方がいいな。

「と言うわけで、梓が何処で死んだか知ってますか？」

「あら？戻ってきたのね、見捨てたあなたなんか助ける義理は無いわ」

僕は保健室に戻り、宮山さんに問い合わせた

「アタイ困ってるのだ。助けてほしいのだ」

「僕も困ってるんだ。解放されたいんだ。」

「アタシだって解放されたいわ、でも無理なものは無理なの」

僕は奥歯をかみしめた

「テメエはそんな考えしつてからそうなんだろ！？ちよつとでも前向いて歩いてみるや！」

僕が立ち上がり、宮山さんに怒鳴る。

それをうるさそうに耳を押さえる宮山が腹立たしい

「前向いて歩いてりゃ絶対何処にだって行けるんだ！それを信じ

ないのか!？」

僕があつくなるのを冷静に見ている宮山、その隣では梓が——あれ?

「梓は?」

「貴方がうるさくて出て行つたわ、保健室の周りにも観客が居るし。」

しまった——大恥かいたよ。もう生きる希望がなくなったよ。

梓が居なくなつたなら、僕は自殺の方法を考えよう。

頭を押さえしやがみ込む僕の前にスーと梓が姿を見せる

「あ、梓もどつて来たのか?」

「見えるようになったのね。」

「はえ?見えるようになった?元から——は、マサカ!

「貴方のポジティブさにより一旦見えなくなったようね。」

「貴様!返せ!僕のポジティブ精神を返せ!」

「貴方がポジティブになつてもどうせ生きる道は無いわ。」

「うるせ!信じてれば……今まで信じてても叶つたことないな。」

「もう僕はダメなのだろうか。地に手をつく

すると、宮山が立ちあがり僕のもとにやってきて手を伸ばした

「貴方はアタシと一緒に地獄の底に落ちるのよ。」

「いやああああああああ」

「貴様——」

「ヤダ。」

まだ何も言つてない!せめて話だけでも聞いて!

「ヤダ。」

そうかこいつ心の中が読めるのか。くそ

死んでしまえ死んでしまえ死んでしまえ死んでしまえ……

「ソレは何かの呪文かしら?」

「死んでもいいことないのだ。」

「黙ってる！」

「アタイの扱いが酷いのだ。」

「あれ？梓、お前も心の中が読めるのか？」

僕が梓に問うと、当たり前のように宮山が

「読めるに決まってるじゃない。バカでしょ？」

知るか！そんな事実聞いてない！

「そうになると、ここにいて仲間はずれはあんただけね。」

「な、仲間はずれ・・・」

仲間はずれこの言葉は好きではない。

常日頃から仲間に入れない僕はいつも一人で居る事が多く
めったなことでは人と話さない。

「ソレはかわいそうね。」

「そう、どうせ僕はすべて可哀そうな人間だよ。いや人間でいる資
格もないかもね」

ドンドン気が重くなってくる。

はあ僕がベッドに座り俯いていると

《全く、この子はからかい甲斐があるわね。》

「はあ！？からかい甲斐だあ！？」

僕が大声で叫ぶとニヤツと笑い僕を見る

「やっと貴方もレベル5になったようね、」

すると周りにそれまでいなかった霊が4体ほど見えるようになって
しまった

・・・そうかあれは宮山の心の声か

「そうよ、おめでとう。喜ぶと良いわ、そうなった以上。ポジティ
ブになれないわ。」

くそやつちまった。いやまだ半径1mだけだ。

誰も居ないところでポジティブになれば何とか。

「ソレが出来ればいいのよ。中々ネガティブからポジティブになる
のは無理よ」

確かに僕も今まで頑張ってみたけど・・・無理だったな

はあこうなれば僕はこの腐れ女と同類になる。

《同類とは失礼ね。》

くそ、読まれたか。

「ねえアタイの足はどうなったのだ？」

そうだった——！！！！

忘れてた。でも、今となつてはこいつの足見つけても、他のが見えるようになったから意味ないな。

ん？何か変な霊が近寄ってきた。

ガバツ（霊が脱衣。）

何イイイイイ！！まさかこいつあの変質者の霊！

ぐああああああああああああああああ

もうこんな世界は嫌だ。

幽霊が見えるようになるし、いい事は無いし。

「いつそ、転校でもして気を切り替えるか？」

「もしかしたら、その学校が最先端技術を導入してるかも知れないのだ？」

「確実に、Fクラスだな・・・」

勉強もできなし、転校してもいいことなんてない。

そんな事を屋上で梓と話していると、ぐぐと腹の虫が鳴った

「腹減った。そう言えば夕飯がないな、帰りにスーパーでも寄ってくか。」

「半額弁当を取り合い、戦いになるのだ。」

止めた、そう言えば冷蔵庫に昨日のあまりモノがあつたっけ・・・

「いつそ、部活でもやって気分を晴らすか？」

「友達募集なのだ」

「残念な感じがするな……」

俺が提案する事をことごとくけなしていく梓

「掲示板で友達作るとか？」

「何か、一昔前のオタクと黒い猫と仲良くなれそう。」

「いつそ、ニートになつて探偵するのだ。」

「ドクペしか飲めなさそうだな。」

ニート、オタクなんて絶対ゴメンだ。そんな事になつた暁には、止めたそんな事を考えると、またレベルが上がる

テレテテッテテッテ——♪

「上がっちゃった！」

「おめでとなのだ、5↓6になつたのだ。」

「おめでたいのはお前の頭だ！——うわッ増えた」

目のまえに見える幽霊が3対増えた。

でも今日まで見てきて思ったけど、あまり遠くのやつは見えないんだ
仕方ねえ足でも探すか、暇つぶしに。

「行くぞ、」

「え、何処に？」

「足探し」

そう言い放ち、僕は梓につかまり屋上から飛び降りた。

梓に触れることができ、梓は飛べる、こいつを使えば空を飛べると

僕はポジティブな事を考えた——いや考えてしまった

シユンツ——ドサツ

「ががが……レベルが下がって干渉出来なくなった……」

僕は思い切り、地面にたたきつけられて、記憶が飛んだ。

こ、ここは……ん？川？

向こう岸に大勢の人が見えて僕に向かって手招きしている。
渡った方がいいのか。

でもコレ渡ると死ぬよな。うん絶対死ぬ
こう言う時に最後の希望に光が……………

——よし諦めるか

僕の人生闇しかないのに、光りなんて有るわけ無い。
全く、ちよつとだけでも希望を抱いた僕がバカだ。
そう思うと僕は川の中に足を入れ渡ろうとしたとき
ジャバツ、急に足を抜いた。

「冷た！寒！この季節川に入るのは無理があるよ！？」
誰もいないのに、大声で叫んでしまった。
恥ずかしい。

そうだ、ここから生き延びれば、霊だから現世に伝わる事は無い。
どうにか、生き延びることを考えよう

まず、あの川を渡ったら終わりだ。

ポジティブになって光を待つか。

「ねえ何してるのだ？」

「今忙しいんだ梓。後にしてくれ」

「アタイの足は？」

「今忙しいんだ梓——は？梓！？」

僕の目の前にはいつの間にか梓の姿があった。
あれ？でもなんで？

「ここは霊界なのだ、アタイの庭みたいなものなのだ。」

「でもあそこで手招きしてるのは？」

「あれは試験生徒なのだ？」

試験生徒？そしてなんで疑問形？

「アタイは3日で卒業したけど、基本はかなりの時間がかかるらしいのだ。」

「凄いな！お前。」

僕が梓を本気で凄いと思った。

するとそこで気が付いた。

「足って、ここに有る可能性は無いの？」

「あ、人間界は探したけど、中々見つかなかったからありえるかも知れないのだ。」

そうか、じゃあ探してみるか。

「でも、探すならアタイだけでやるのだ。」

そんな事を言いだす梓の顔は真剣だった

「アンタは人間界で意識を意識を失ってから3日はたってる。」

「はあ！？そんなに！？でも、ソレがどうした？」

「こつちに居ると、人間界での本体の寿命が短くなるのだ。」

ソレは僕がこつちに居る間に、僕本体が死んでしまうと言うことか！？

「アタイが下界に飛ばすけど、枕元にあるノートは触らない方がいいのだ。死神が見える、そして名前など書いてはいけないのだぞ。」

「何そのデスノートみたいなの。」

「デスノートなのだ。」

「うおい！ちよつとは変えろよ！」

そんなことを言っているとおおおおおお

不意に身体が軽くなり、意識が再び無くなった

気が付くと、僕はベッドの上で寝ていた。

枕元にはノートがある、僕の手がそのノートの上に乗っていた・・・

「人間って面白。」

「いやあああああああああああああああああああ」

友達幽霊

梓が霊界に消えてから3日

僕の体重はかなり減り（蟹に根こそぎ取られた）、多くの人間が減って行った

「サイス！お前を見つけ出して始末する！」

って！んな訳ねえだろ！！

勿論ノートは燃やした。

その後、ノートの記憶が消えることなく、黒い死神も消える事は無かった

「なんで？」

梓が帰ってきたら、この死神は消えるだろうか？

それとも僕はもうすでに死を避けられないのか？

ま、良いか僕には友達も・・・友達・・・か、

ソレは中学生の時だった。

僕には遊んでいた友達と思われる人物が居た

その人は石岡君。業務用掃除機に股間のアレを突っ込んだあの石岡君・・・

——— じゃない。

顔は覚えているのに名前は覚えていない。

中1の時。

「おい統也あのゲーム買ったか？」

「ああ。。。か。買ったよ」

窓際だった僕の席で風に吹かれながら、僕らはゲームの話をしていった。

あのゲームは・・・売ってないし、まだ有ると思う。

しかしある日の下校中、その人は・・・事故にあった

「おい！。。。がはねられたぞ！」

「大丈夫か！？」

僕は『彼』には駆け寄らずに遠くから見てることしかできなかった。

倒れている『彼』の目は僕を睨むように見ていた

車の運転手は捕まり、『彼』は救急車で運ばれた。

一瞬の事のように、時間が止まったかのように、僕はそこに立ちすくんだ。

そして待っていた、『彼』が戻ってくる事を。

しかし『彼』が、戻る事は無かった。

死んだのか、生きているのか、そんなことも解らない。

それから数日間僕は部屋から出れないまままでベッドの上にいた

消したかった、無力な自分を。

消したかった、『彼』が居なくなったと言う事実を。

消したかった、消したかった、消したかった。

でも消えなかった。

僕はそんなこともあって、これ以上の友達を作らなかった、

——いや作れなかった

友達を作ればまた傷つく、浅い関係なら裏切られる。
そんな友情はいらない、一人でも構わない。

そう、僕は自ら孤独を望んだのだ

孤独を望む者もいる、望まない者もいる……が、

孤独に耐えられる者はいない。

僕もそうだった、孤独に耐えられなかった。

しかし友達も出来なければ、孤独のままだった

両親は海外に行ってしまった、僕は一人暮らし、家でも孤独だった
学校も家も、僕は世界で独りぼっちだ

「統也、今度ゲームやろうぜ」

「統也、遊ぼうぜ」

「統也、あそこまで競争だ！」

もう聞く事の出来ない『彼』の声

もう見る事の出来ない『彼』の姿

もう追う事の出来ない『彼』の背

霊界に行けば、彼に会えたかもしれない。

しかし『彼』は僕を覚えているだろうか？僕は『彼』をわかるだろうか？

そして『彼』の名前は……？

僕はダメな人間だ『彼』は僕の唯一の友達……いや親友だったのに

僕は全然覚えてない。

『彼』のところだけぽっかり穴があいているみたいに。

僕は全然覚えてない。

僕は……僕は……

「統也、統也！」

「んん？ああ寝てたのか。」

僕が目覚めると目のまえに梓の姿があった

「あれ？帰ったんだ、梓。」

「そうなのだ、」

梓が少し落ち込んでいる、何があったのだろうか？

「どうした？足なかったのか？」

「ああうん、それもそうなのだ。でも統也・・・」

梓の顔が暗くなる。何だ？何があったんだ？

「どうしたんだ梓。言ってみろ、」

「うん、統也の夢。」

梓が口にした単語『夢』その夢は

将来の夢か、レム睡眠中に見やすい夢か。

「友達の・・・」

「ああお前夢も読めるんだ。僕の最初で最後の友達。」

「・・・今もその友達は統也の事、友達だと思ってると思う？」

下を向き言う梓、しかし言葉の一つ一つが真剣だった

僕はその緊張感に押され、唾を飲む

「僕は少なくとも友達だと思ってる。でも『彼』は僕の事なんて、」

「・・・そう、」

下を向く梓、僕の過去がつかつたのか？

「もし、友達が悪い事をしたら正してあげないといけないのだ」

梓が何かを呟いたが僕は聞きとれなかった。

いつもと変わらない日常

て言っても霊が見えるようになってからの日々だけど。

梓の足も見つかる事もなく、レベルも上下しない。

何と言うか、霊が普通の人間に思え存在していても違和感を持たなかった。

そして家でソファに座りながら梓とテレビを見ていると・・・

《今日、原因不明の物体破損が大量発生しました。》

何気ないニュース、レポーターのお姉さんが取材しに行っているその現場にはバラバラにされた車や瓦礫がれきの山だった
そして僕の横で梓が啞然として画面を見ていた。

「物騒な世界だな。梓気をつけろって、人には触れなかったんだな」
「違うのだ。」

梓が画面から目をそらすことなくそんな事を言う。

「駄目なのだ。人間のモノを壊すのはダメなのだ・・・」

そうつぶやいた瞬間が画面が砂嵐と化した。

数秒ザーと鳴り響き、《しばらくお待ちください》の文字がでた
「梓、まさかコレ・・・」

「うん、レベル10の霊の・・・いや悪霊のせいなのだ。」

悪霊。霊とどう違うんだ？うらみが重なって凶悪になったとか？

そんな事を考えながら画面を見て硬直していると、
ピピピと僕のケータイが鳴り出した。

ピッ

僕は別チャンネルの同じニュースを見ながら右耳に電話を当てた。

「もしもし、山本です。短所はネガティブ。長所は無い」

《そこまで聞いてないわ。》

何処かで聞いた事のある声。その声主は

「宮山？」

《そうよ、宮山彩乃2年4組特技は独り言。》

「そこまで聞いてないのだが。」

《貴方も2年でしょ？》

何だこいつ、今そんなの如何でもいいだろ？

《それより、テレビ見た？》

やっぱその事か。

《貴方、レベルを上げなさい。》

「断固拒否。」

《梓から聞いたわ、貴方の友達的事》

僕が拒否した瞬間に友達の話をしてきた。

きっと気をおとさせる気だろうが。そうはいかない

《今画面に映っている見えない悪霊は、その友達よ》

「は？」

そなん返事しかできなかった。出来るわけ無かった。

死んだ友人が霊となってもおかしくは無い。

しかしなぜ悪霊に？なぜ人に迷惑を？

《その様子だと理由がわかっていないようね。》

「ああもしその悪霊が僕の友達だったとしても、なぜ・・・？」

《ソレはね貴方に裏切られたから。》

中学1年の時だった。

『彼』は事故にあった。

しかし僕は何も出来ずにただ見てることしかできなかった

その時『彼』は僕の方を睨むように見つめていた

コレは助けを、必死に助けを求めていたのかもしれない。

しかしそれも今となつては解らない。

もし『彼』が僕に助けを求めていたのなら、ソレは裏切りになる。

僕らの友情はそんなものではなかったはずだ。

しかし・・・

「おはよ、山本君」

翌日の朝ばらから僕は保健室に出向いた

「僕もレベルを8までにすることが出来た。」

「そうでもソレじゃ『彼』を見る事は出来ないわ。」

凜と言いきる宮山

「でも、僕は彼と合う資格なんてないんじゃないだろうか？」

「どうしてそんなこと言えるのかしら？」

僕の質問に質問返ししてくる宮山

「どれだけネガティブになってもレベルが10にならないんだ。」

「そうね、まだ貴方は無傷に等しいわ、傷を負うのよ」

そんな意味のわからない事を言いだす。

「心の傷を。」

「そんなの僕だつて！」

僕だつて傷だらけになった。

「そうね、でも貴方の傷は浅いわ。私に告白しなさい。」

「はあ!？」

また意味のわからない事を言ってくる、本当にこいつの頭の中にはカッコウが居るのかもしれないと僕は思った。

「早く、どうしたの？怖いのか？」

「ッ!・・・す、すきです・・・」

「そう、アタシは嫌いよ。」

傷つく。かなり傷つく。わざとだとわかっていても傷つくなんて傷の深さだ。

「その程度でこれだけだと、二三人でいけそうね」

宮山の提案により僕はなぜかナンパしなくてはならなくなった。

「スイマセン、僕君の事が好きです。」

数回立つとなれる

「私は嫌いです」

でも即答は傷つく

僕のレベルはみごと、10レベルになった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8019y/>

僕の存在は幽霊同等

2011年11月24日21時38分発行